

日本語教育における類義語指導の 一考察

—日本語学習者の振り返りからみる困難点と 学習方法—

三井 一巳

要 旨

従来の類義語に関する研究では、教師による指導の必要性が多く指摘されてきた。効果的指導を考察するため、本稿では日本語学習者の抱く類義語学習の困難点を探ることを目的とし、パイロット調査を行った。調査協力者は日本の大学院に在籍する学習者であり、質問紙とフォローアップインタビュー調査を通しこれまでの学習経験を振り返ってもらった。調査の結果、類義語の意味の差異に加え適切な用法かどうかという点が学習者を悩ませる要因であることが分かり、インターネットの使用が用法の確認に効果的だという意見もみられた。今後は学習者の理解度や学習段階に合わせた支援の必要性があると考えられる。

キーワード

類義語 日本語学習者 困難点 学習方法 指導方法

1. はじめに

日本語教育に携わる中で、日本語学習者（以下、学習者）から「AとBの語の違いは何か」という質問を受けることがよくある。新出語には多くの場合母語の対訳がついているが、それだけでは類義語同士の差異が捉えられないという。対訳は語の意味を理解する上で効率的な手段だとネーション（2005）にもあるが、類義語の場合は意味の重なりや用法の違いなどの要素も絡むため、教師による指導の必要性が考えられる。

学習段階が上がるにつれ学習者が類義語に出会う機会は増していくが、学習者は実際どのようなときに迷うのだろうか。学習者にとってどのような指導が必要か考察するためにも、まず一度学習者の立場から類義語学習の際に感じる悩みを知る必要があると考えた。これを踏まえ本稿では以下の2つの問いをたて、調査を行った。

RQ1：学習者は類義語を学ぶ中でどのような点を困難だと感じたのか

RQ2：学習者が類義語学習における疑問を解決するために効果的だと思う方法は何か

2. 先行研究

「類義語」とは何かについて、宮島（1977）は「同義語」「上位語と下位語」「部分的にかさなるもの」の3つを類義語に関係するものとしている。意味の重なりは類義語を学習する者にとって、また指導する者にとっても類義語が難しいと感じる要因の一つであろう。

浅野（1991）は類義語同士の意味の「違っている部分」を教師が正確に見極める必要性があると述べ、さらにその分析結果を学生に「簡潔に説明」することが重要だとしている。山内（2013）もまた、教師は学習者に質問された時のために使い分けに関する知識を持っていなければならないとし、教師による研究会などでの類似表現研究は非常に重要であると述べている。

岩佐（2011）は「学習者には指導が不可欠である」とした上で、類義語の語義説明が個人の教師にゆだねられることが多いことに対する問題点も挙げている。教師による類義語の意味の差異の説明が「大体同じです」で済まされてしまう場合や、一見無難に見えるが適切でない説明である場合がそれにあたり、指導する場合は「教員が明確にその差異を示す」ことが必要であると述べている。類義語の分析や指導のためには、教師一人一人にある程度の訓練が必要であることが分かった。

しかし学習者は、ときに教師が予想しない語同士に類似性を感じることもある。森田（1968）、倉持（1986）によって、日本語母語話者の感じる類似性と、学習者の感じる類似性にズレがあることが指摘されている。本来は意味の重なりがなく、類義語と判断しにくいものまで、学習者は類義語に含めることがある。その原因として、母語の対訳による使用範囲のズレが影響している可能性が考えられる。

松田（2000）では、学習者による基本動詞「割る」の使用範囲が、本来の域を越えた「分ける」「切る」にまで及んでいることが報告されている。その理由として挙げられているのが母語の影響である。「割る」の対訳として中国語を例に挙げると「分、切、除、打破」など複数あり、必ずしも一対一の関係にはならないことが分かる。ここから日本語と母語との間に用法のズレが起き、用法や意味範囲のズレにも影響を与えるのである。

教師による類義語指導の重要性や準備の必要性があることが分かったが、日本語母語話者の感じる類似性と学習者の感じる類似性にズレがある場合、指導が求められる類義語は膨大になることが予想でき、限界があるだろうと考える。また、そのような状況下で学習者はどのように類義語を理解し学んでいくのか、学習者の立場からみた研究は管見の限りない。そこで本稿では、学習者がこれまで類義語を学習する中でどのような点に疑問を感じてきたのか探るため、パイロット調査を行った。

3. パイロット調査概要

3.1 調査協力者

質問紙調査の調査協力者（以下、協力者）は日本の大学院に院生あるいは科目等履修生として在籍する学習者 11 名である。日本語学習歴は 4 年以上であり、日本語で行われる大学院の講義を受講できるレベルである。フォローアップインタビューの協力者は、学習経験が似ている C と S の 2 名である。二人には大学から日本語学習を始め、大学在学中に日本へ留学しており、卒業後は日本の大学院博士後期課程へ進学したという共通点がある。

3.2 調査内容

質問紙調査では協力者 11 名に、類義語を学習する中でどのような点または状況で疑問を抱いたのか、またその対処法について質問した。フォローアップインタビューでは、質問紙に回答した上で、内容を掘り下げたより詳しい状況を聞いている。調査はいずれも早稲田大学の倫理審査を受け、承認を得た上で行った。

4. 調査結果及び考察

4.1 質問紙から見た悩みの傾向と対処法

表 1 質問紙の調査結果 (1)

	質問内容	回答
1	類義語の意味の違いに迷ったことはありますか。	はい (11 人) いいえ (0 人)
2	どのような時に迷いましたか。(複数回答可) a.話す b.書く c.読む d.聞く	a (9 人) b (10 人) c (0 人) d (0 人)
3	どのような点に迷いましたか。(複数回答可) a.類義語と類義語の意味の違いが分からない b.どれが適切なのか分からない c.母語の訳と意味や使用状況が異なる	a (6 人) b (10 人) c (5 人)

問 2 では 11 人が「a.話す」や「b.書く」を選択しており、アウトプットの際に迷う傾向がみられた。問 3 では 11 人中 10 人が「b.どれが適切なのか分からない」を選択しており、意味の差異だけでなく用法を意識していることが分かる。これは類義語を使用する際に抱いた迷いと推測することができ、アウトプットの際に迷う傾向と密接な関係があると考えられる。さらに協力者は母語と日本語の意味範囲や用法のズレにも気づいており、これも類義語を使用する際に迷いを抱く要因となっている可能性がある。

表2 質問紙の調査結果 (2)

	質問内容	回答
4	類義語の調べ方で効果的だった方法は何ですか。 (複数回答可)	a (5人)
	a.辞書で意味を調べる	b (5人)
	b.先生や友達に聞く	c (10人)
	c.インターネットで検索(辞書・用例)	
5	類義語の調べ方で効果的ではなかった方法は何ですか。 (複数回答可)	a (7人)
	a.辞書で意味を調べる	b (4人)
	b.先生や友達に聞く	c (1人)
	c.インターネットで検索(辞書・用例)	無回答 (1人)
6	今後、試してみたい調べ方はありますか。	はい (4人)
	はい →方法を書いてください	いいえ (7人)
	いいえ →理由を書いてください	

問4の「類義語の調べ方で効果的だった方法は何か」という質問に対し、10人がインターネットの使用を挙げ、問5の効率的でなかった方法として7人が「辞書」を、4人が「先生や友達に聞く」を挙げた。辞書の使用と人的リソースは、調べる方法として「効果的」「効果的ではない」がともに回答数が多く、協力者によって評価が分かれるところである。辞書に対しては、問4と問5の両方にチェックをいれている協力者も1名いたが、辞書で解決した場合としなかった場合があるがゆえと考える。問6で今後試したい調べ方として挙げたのは「コーパス」「類義語の使い方が系統的に整理されている本」「ラジオ」「文脈で考える」であり、用法に注目した意見が多い。「いいえ」を選んだ理由として多かったのは、「今の方法で十分、他の方法を知らない」という意見だった。今の方法とは、主に辞書やインターネットのことである。

協力者はなぜこのような評価をしたのだろうか。効果的というインターネットを学習者はどのように使用しているのか、「教師や友達に聞く」が効果的ではないと評価した要因は何か、などフォローアップインタビューで探った。

4.2 フォローアップインタビューから見た悩みの傾向と対処法

質問紙では、CとSともに「話す」ときに類義語の使用に迷った経験があると答えている。調査者の「なぜ迷うのか。」「話すときは中国語の対訳を思い浮かべてから日本語を考えていたのか。」という質問に対し、Cは大学在学中の経験をこのように振り返っている。

表3 Cのインタビュー (1)

C	そこまで頭が動かない。
調査者	動かない。
C	ただ一瞬、あ、この二つの類義語があるね。
C	じゃ、どっちを使うねって迷って、一回たぶん話を止まっちゃう。
調査者	止まっちゃう？
調査者	じゃ中国語は考えないで…。
C	そうそうそう、頭もう真っ白で。

Cは話している際に類義語が思い浮かぶと頭が真っ白になってしまうと述べている。母語である中国語を考える余裕もなくなり、話が止まってしまった経験から「1つだけの方がよかった」と思ったこともあると述べた。Cは、2つの語がある場合どちらかが間違いであると考えており、誤用への恐怖があるため話せなくなると語っている。

Sも同じように「どちらかが適切だ」と考えた経験があった。

表4 Sのインタビュー (1)

調査者	どのような点に迷いましたか。
調査者	意味の違いが分からない。
S	そうです。
S	どれが適切なのが分からないのが一番。
S	たぶん、どれを使っても日本人としては分かると思うんですけど、やっぱり適切なのが必ずあるので。

ここでSは、類義語の中には使用する場面に応じて適切なものが必ずあり、日本語母語話者には判断できても学習者である自分には分からないと述べている。用法に適切なものがあると思うようになったきっかけはあるか質問したところ、Sは日本語能力試験に出題される問題の形式が関係していると振り返った。

表5 Sのインタビュー (2)

S	これ、一文の、こういうたとえば「団結」っていう単語があって。
S	abcの中でどれが一番、あの正しく使われている文なのか…っていう選んでもらうっていうのがあって。
S	でも「知る」と「分かる」だと、あそこだけが穴になって、下に1, 2, 3, 4の漢語、漢字語彙があって…。
S	どれが一番適切なのかっていうのもあります。

S は日本語能力試験の対策をしていく中で、文に適している語を選択するという問題に
あたり混乱したと述べている。つまり、学習する中で出会った問題の形式を通し、語の意
味が似ていても文脈に応じて適切なものがあると考えようになったということである。

両者ともに話す際に類義語の使用を迷った経験があり、その要因はどちらかが適切であ
ると考えたからであることが分かった。さらにそのように考えるようになった経緯には、
学習する際の出題形式も関わっている場合もあった。

次に、迷った際にどのように対処してきたのか質問した。それに対し S は「人に聞く」
特に教師に聞いたと回答した。大学在学中は教師に「この 2 つはどこが違うの」と質問す
ると中国語で説明してくれたため効果的だと感じたと述べている。反対に C は、教師によ
る類義語の説明について否定的な評価をしていた。

表 6 C のインタビュー (2)

C	例えば、最初は「知る」っていう単語が出るとき必ず「あ、この類義語は 「分かる」だよな」。
C	「分かる」はまだ出てないのに、必ずそこで「あ、これと似ている単語は何々 があるよね」。
C	で、それを言われた瞬間、え、何の意味？

C は教師の説明を聞き余計に迷ってしまったと大学の授業を振り返っている。授業中に
扱う新出語に類義語がある場合同時に提示しており、C はそれが原因で意味の理解ができ
なかったのである。C は来日後、次第に類義語の意味も分かるようになり、「先生は逆にそ
ういう説明しないほうがはっきり分かるかもしれない」と考えるようになったとも述べた。

ここで注目したいのは S が教師に自ら質問をしているのに対し、C の場合は疑問を抱く
前に教師が先回りをして意味の差異を説明しているという点である。S は一度類義関係に
ある語を別々に学び理解した上で、自分のタイミングで教師の説明を受けている。それ
に対し C は新出語の理解が定着する前に、教師のタイミングで類義語を指導され、混乱した。
類義語は意味や用法など混乱する要因も多く、教師は学習者の学習状況を見極めた上で、
段階的に指導することが重要であると考ええる。

C は、母語の対訳による説明が、使い分ける際に混乱を招いたこともあると述べている。

表 7 C のインタビュー (3)

C	例えば「知る」は「知道」「分かる」は「明白」ってそういう説明をもらっ て。
C	でも自分は中国語母語話者だから実際「知る」と「分かる」はその違いは何 となく文の中で分かる、その使い方。
C	でも私、じゃ、中国語の「知る」と「分かる」はどういう…、ちゃんとその 違いは中国語で説明しろって言われても説明できなくて。

これは「知る」「分かる」の対訳にあたる「知道」「明白」を、普段意識せずに使い分けられているため、改めて用法を考えた際に理論的な違いが分からなかったという経験である。ここから、動詞の場合は語の意味を確認するだけではなく、用法の確認も必要であることが分かる。さらに、母語と日本語には意味や用法のズレがある場合も多いため、複数の用例を提示することも重要だと考えられる。

最後に、質問紙調査で類義語に迷った場合の効果的な調べ方だと 11 人中 10 人が回答した「インターネットの使用」について質問した。使用開始時期は C と S の二人とも、大学卒業後であった。大学在学中は「教師に聞く」「辞書を引く」などをしていていたが、卒業後は教師が身近にいない環境になりインターネットを使用するようになったと振り返っていた。

辞書を使用する機会が減少したことに対し、C は「辞書にも用例はあるが、国語辞典の場合は用例に古文が混ざっていることもあり混乱した」と述べ、S は「辞書の意味の説明と用法だけでは類義語の使い分けまで至らないと感じ、来日後は辞書とあわせてインターネットを使用するようになった」と述べた。

「インターネットの使用」とは、検索エンジンの使用を指している。具体的には検索欄に調べたい一語を入力後検索し、出てきた記事でどのように使用されているか複数の用法をみるという方法である。二人に共通しているのは「実際の用例から何となく用法をつかむ」というものであり、多くの用法に触れる必要があるためインターネットが効果的だと感じたという点である。

以上のことから、用例に対する意識の高さがうかがえる。多くの用法に触れることで、語の使用範囲を学ぼうとしている C と S にとって、膨大な使用例があるインターネットで検索することがより有効な対応策であることが分かった。S は今後もインターネットの使用を続けたいと述べ、C はコーパスの使用に興味があると述べている。

二人に共通している用法から類義語の差異をみつけるという方法は、初級から中級、上級へと学習レベルが向上する中で自然と身につけたものであった。既知語が増えるにしたがって類義語が増えることは必然であるため、用例から用法を推測するこの方法は、効果的である可能性がある。

5. おわりに

これまで日本語学習者にとって類義語は難しく指導が必要とされてきたが、学習者がどのような点に悩んでいるか、学習者の立場からは明らかにされてこなかった。C と S の意見からは教師の説明が理解を促す場合と、反対に妨げてしまう場合が見られ、その原因としては学習者の理解の深さや学習段階に応じたタイミングであるかどうかという点が考えられる。また対訳のみでは用法の差異を考える上で混乱を招く原因になる可能性も見られた。そのため、教師は学習段階に合わせた支援を行っていく必要があると考えられる。

今回の調査では、教師の側からだけでは見えない学習者自身の意見を得ることができた。学習者の経験を振り返ることで、類義語を使用する際の適切性を重視していることなどが明らかになったことは、今後学習者にとってどのような指導が必要か考察する際の一助となるだろう。

本稿の調査はパイロット調査であったため、調査協力者の人数が少なく学習経験などに偏りがあった。今後はさらに調査の幅を広げ学習段階に応じてみることで、学習者が類義語に悩む状況を調査していきたい。

参考文献

- 浅野百合子（1991）『教師用日本語教育ハンドブック⑤語彙』凡人社
岩佐靖夫（2011）「日本語教育における類義語指導の一考察—系統的な指導原理へ向けての提言—」
『尚美学園大学総合政策研究紀要』20、pp.17-24、尚美学園大学
倉持保男（1986）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』9、pp.47-55
松田文子（2000）「日本語学習者による語彙習得—差異化・一般化・典型化の観点から—」『世界の日本語教育』10、pp.73-89
宮島達夫（1977）「意味の体系」『岩波講座 日本語 9 語彙と意味』岩波書店、pp.3-41
森田良行（1968）「類語について」『日本語教育』11、pp.14-27
山内博之（2013）「日本語教師の能力を高めるための類似表現研究」『日本語／日本語教育』4、ココ出版、pp.5-20
I.S.P.ネーション（2005）吉田晴世、三根浩（訳）『英語教師のためのボキャブラリー・ラーニング』松柏社

（みつい かずみ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士課程）